



諾家句集

特別
~5
3374
1



諸
司
集

利
3-374
1

利 5
3974
卷



韻字平反
 添ニ新ニ
 鑑定
 作ク者ホ
 關ク防ホ
 接ニ行カ
 福ニ井カカキ
 氣ク韻ク
 序ク
 校ク西ク
 跋
 印ク章ク
 著ク述ク
 記ク釋ク

ある人の別冊に梅のそと
ある一子戯り

かう嘆かす事をもて嘆ふ牡丹か
芥子

老妻

袖引を芳子とて嘆ぬわとまきん
ささふしよ出はる馳をそしお節
しづくより花の伸あふ牡丹か
牡丹又心く極ある日者のか
止く風の馳をぬけさう牡丹の凡
白牡丹お家よ孫れを嘆ぬる
下りる向しあつたおぬる屋とす

老の春

我ると思ふを掃をきあし

古き情をいふ聲ををさる

いの燈也熱目そをよめと花

とらるる京子妙を感くそ

明日おもの言ふとて花の春

とらるる京子伝

あそんそと山とあそんそと節を感か

八景のあそく娘と思つとて

花の咲くよと音つた孫を掴

さきかきをきこつてをりり山程 梅心

田舎水

竹代さほゆれを引子花の色を
おぼゆるはる佳入波のやうな
まーりひきあふひきの出るさま
たのよのぬをわらひーとあ

波のえはききすしむふひが とも

あつては白魚をすくと極のい祖翁の
眼力たきか白魚子る極あきハと

三十一

あつては白魚をすくと極のい祖翁の

白魚や網ををる大れ五と人

おゆや、ま笑おぬ二人扶持

ま原一ととる船人いん

世に扶て昔一の近く角田川

去年にまゆり集ますーりおはし 小裁

ふれの花ちりきし揚、さな

崎のねもゆをこまの田舎より

秋海より陽光の夏少多一樹あり

五、五

晴みおと思ひ控れい花火のれ
 門のよ人之をむる印家
 暮るるやうおしくしそらの日
 みろひの押さうりり水の
 程さうれお狐秋経の垣根に
 くりくるおの秋さき花やうに
 木さうお川の昔一の嬉りのれ
 禁さうお花の身探る指火に
 旅さう程さうりりおくれ
 松風のまつりりおる時るくれ

そ

物後

おまおおのりさう腹のらく
 淋さうおおさうとすおまお
 道さうおおけをさうおまの欄
 ぬくさうおさうおお
 晴みをさうおさうおまの欄
 昔おお程のさうおまお花
 旅のさうお中お花咲お指火
 さうさう川城くおお月お
 晴みお程さうおれおの月
 ぼさうのさうおさうおまお

手ろくく 難ひ一筆のひらききこひ 叶ひよ

りれいこりまをーの帯子久まりを 仙傳の延白

一順十二月の露白を 摩訶子細 名 柳 中子 あり

多ゆやかこそ 潤ふ花を 帯巾 一求

船路 陸路 水 幸 ちる ちる 介我

難ひ 難ひ 立南り ころり ツカス 難ひ 遠 剛

時分 使のたてまつる ときある ときあり

近年 え 春月 曇る こと とき 氷 壺

少壯 むらゝく 林 汎 あり 石 老

根ふ せりー 牡丹 子こ へ 庭 掃 ち 永 行

四十一

陸を 海へ 舟りの とき あり

名 あり 凡 昔 劇 原の 難ひ 宛 字 門

千多 ちり ちり 風 吹く とき とき 斜 壺

難 難 難 難 難 難 難 難 難 難 信 志

こと とき とき とき とき とき とき とき とき とき 可 平

八 あり 徳の 千 あり あり あり あり あり あり 梅 路

生 生 生 生 生 生 生 生 生 生 能 里

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 万 料

柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 至 堂

四 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 特 子

昔の事〜千一財宝の心 丹志

み

人車〜心〜心〜心 梅香 一貝

はり〜さハ百をよりし少解心 一字門

〜と〜ぬあるまう花のきり〜 得也

声の年〜ゆゆ〜種のおと〜き〜 孤月

おさ〜りの水のきり〜るお日〜れ 月か

鏡〜あ〜る〜のきり〜は〜源〜 鏡行

馬〜ゆ〜る〜あ〜き〜山〜や〜る〜の〜声 怪軒

人〜ま〜う〜解〜年〜々〜 秋の月 逸詞

路〜〜中道〜う〜〜葉の〜花 少意

西〜あ〜る〜風〜情〜を〜解〜 水周

ゆ〜あ〜る〜お〜を〜い〜る〜お〜意〜心〜の〜心〜 培基

〜り〜り〜れ〜を〜解〜て〜る〜の〜解〜心〜心〜 介秋

月〜を〜つ〜視〜ひ〜ま〜や〜ら〜中〜集〜園〜子 石光

○

所あるに思ふ春をそとて

えりや 暁にさくよみこの山

のたれとら白玉といへぬの肉

云葉さく 穂にさし金すけらうに

伐休むはささやうらるる時あは

きつておのちさきさうあのみるに

目せしと何うと云ん花の主人

楊まてらお鱈ふゆのさ

つかお鷲の岩戸れかきまの園

しと 神やる 腹盛はて橋の村

月とあをきとれと思後か

おとよりぬ 園にあらまの目の

とる候てしうりもきき 柳のま

中秋陰

小るさく人れやまを月こさ

このさく舟のや 舟にれりふの月

るのさくさく 舟にさくさく

感心光

ささし 市をききあは 成るあは

路にさり 高城をさす 雲をさ

あさ 雲さく 時をさす 舟にさ

あさ 向い 花をさす 舟にさ

花をさす 舟にさす 舟にさ

朗一

松竹

あは

耳也

文苑

松更

産尾

朗一

田也

美の

投儀

舟也

西馬

帷也

一也

十也

舟也

舟也

白萩を秋七紅の先あるの
 の道の原自修や原十の月
 虫隊の身く眠りり秋の陰
 はしの秋はを寂しく秋あまひ
 ちさき声の隣り高き
 中我も細くあまを 秋空
 朝又のかのさくらもやまの
 笑のさふる毎年こもあまり
 花のまをも世帯のや 女
 と秋山浮つ

花気様 曲去様あるの中 又物
 大物店 一ををほりて金ま
 此の一句を
 流るるの重なる結ぶる花のしるさるり 母は
 牡丹のよ通や中長子に其の
 雨ふりてふらふらとそめぬるを 白
 阿つらさ大けるや通ぬるを 青物 母は
 君とれそ大咲みくうふ女ゆき 曰人
 けさるま借ぬれり 大
 牛

ヒウ
 ムロシ
 高き

遠く侍て松を採りて樹をわし
そふ花を採りて硯をわし
大正

家令

可ゆるや江の子このしと
活居し皆花をわしつ
意の年清経還のれよ

維新 第十月
わしつ花を採りて硯をわし
わしつ花を採りて硯をわし

わしつ花を採りて硯をわし

わしつ花を採りて硯をわし

美徳の物道にのをわしつ
わしつ花を採りて硯をわし

大伴皇太子
わしつ花を採りて硯をわし

僧の通照
わしつ花を採りて硯をわし

花の所へ色あはるる色あはるる花

〇

原氏流るる花見さるる園あるは 野の又

花こころの葉のしあはるる公の葉の 士朝

心さるる心さるる心さるる心さるる 西馬

心さるる心さるる心さるる心さるる 廿四

心さるる心さるる心さるる心さるる 暮るる

野の

花の所へ色あはるる色あはるる花 日人

花の所へ色あはるる色あはるる花

花の所へ色あはるる色あはるる花 夕暮

夕暮るる花の所へ色あはるる色あはるる花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花の所へ色あはるる色あはるる花

花の所へ色あはるる色あはるる花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花の所へ色あはるる色あはるる花 花

花

あつたふしにちかふ子孫のそとに 記 二宅年
念の徳もく可らるるに ちかふ

其ちちと印と印のちかふ柳 柳 柳 柳
まらるるに ちかふ 柳 柳 柳 柳

捨之に ちかふ 柳 柳 柳 柳 柳 柳
あつたふしに ちかふ 柳 柳 柳 柳

大あつたふしに ちかふ 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳

あつたふしに 記

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

あつたふしに 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳

てきんふんそくしんてい蔵の巻

土原景且 勅歌

節のめく馬衣と山なりぬののふ

あはれふくさるうらみかた

ゆけりそめくはるるきさうか

辰舟りあきさなれ鏡りきさうく

全歌ら美人なるを

夕くちやあを鏡のきり

よ

いへんかたの風のとほり

夕たをふくにむめおのけ

舟のあはれ

川は舟のあはれ

中

あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれ

画原
日人
書き
よくま

玉
朱
云

雨もやどひとあつくり 草の露 草の露

書きかへ道よりよみ 草の露 草の露

一 草の露の露よりよみ 草の露 草の露

ね 雨もやどひとあつくり 草の露 草の露

草の露の露よりよみ 草の露 草の露

草の露の露よりよみ 草の露 草の露

ね 雨もやどひとあつくり 草の露 草の露

草の露の露よりよみ 草の露 草の露

草の露の露よりよみ 草の露 草の露

草の露の露よりよみ 草の露 草の露

草の露の露よりよみ

草の露の露よりよみ 草の露の露よりよみ

草の露の露よりよみ 草の露の露よりよみ

草の露の露よりよみ 草の露の露よりよみ

草の露

草の露の露よりよみ 草の露の露よりよみ

草の露

草の露の露よりよみ 草の露の露よりよみ

草の露の露よりよみ 草の露の露よりよみ

草の露の露よりよみ 草の露の露よりよみ

かゝりしとみりし世をたのむるのこゝろ
福福りたてまつるゝとんほふ
季の鳥や徳名の書の上のひらきあり
とありあの枝よ日のこゝろや節のたれ
風は昔の雲をたれとあきの月
しらべの枝をみ ぬる 枝のたれ
人のこゝろをわがまのうらみとたれ
子 ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
のこゝろをたれとあきの月
葉のこゝろをたれとあきの月

田子 ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
のこゝろをたれとあきの月
えよこゝろとたれとあきの月
老ねし昔の枝をたれとあきの月
四所よぬるのこゝろをたれとあきの月
しらべの枝をみ ぬる 枝のたれ
ゆきをたれとあきの月
もろもろあつたれ月あきの月
炬火の向ふのこゝろをたれとあきの月
おちてあきの月

白き

海客もまた一せりあひひちり一海客も
 多岐もあしあひれ老樹れ物か 夜義
 ありとふい散る目もやまの田植か
 老よりり花のまよりりさの秋
 と秋秋と知ても門掃く男が
 各りあはるるのせきと階をうり
 大葉の道をもあきくのちるさか
 掃りゆくを掃やと一のそれ
 柳のゆとくを飽ちりや 郭へ
 そ 晴鳥 白旗 ちりあり
 ちりあり

ちりあり

晴鳥

日光を暮るる所よりさす一ちり途ちり

けさくこのりとしる山ゆりや 柳系法を

あはる山を人何れも我をさるる門り

時をちりありや 心

ちりありの原山あり

柳系法を

おの根をさるるの木の葉か 波山

歌
の
白

秋の夕陽を眺むれば
夕陽の影を
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夕陽の影を眺むれば
夕陽の影を

夫

妻

之

親

夕となく野下やそ風の光りか
 日の伸い草もろしとて水仙の花
 しの月も序や底に花を掃く
 空をこのる花のまらゆるは
 ちりとも松葉を乾まらぬは
 山名をのたろくさうんまらるか
 三輪まらぬ提をちりく
 尻のまらぬ籠るまらぬまらぬ
 かなる早女能人のまらぬ
 少山や月も時るまらぬ
 空のまらぬまらぬまらぬ
 少秋を照く鳥やまらぬ

小舟
 牡丹
 一頁

風はふ木をくゆるまらぬ
 中の他う月も時る水のう
 秋風の起るところまらぬ
 草花をすくまらぬ
 籠るまらぬ
 柔らかなるまらぬ
 山のまらぬ
 大空のまらぬ
 空を照く花も時る
 しの月も序や底に花を掃く
 空をこのる花のまらゆるは

牡丹
 七世川柳
 福芝

七世川柳
 福芝

押さる海庭若仕くる花とん
さる庭の借る持る江中
二層へし香よこまき招信
高りの積りを喰一年の飯
岸のふさるおまじ橋の石
路のゆわあのおまじ細作
巨龍のつとえの極小や
お石女御はやさし
山家言ふれ海くこまき
若く頼りよほまおまじ
さるめしし玉子の庭や
さるさるれさましやめ

さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ
さるさるれさましやめ

善工修れ腰まきる
おまじおまじおまじ

善工修れ腰まきる
おまじおまじおまじ

おまじおまじおまじ

おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ
おまじおまじおまじ

おまじおまじ

少佛を疎て去却よつるを

ふの葉又よしとてさしなす 三歌集 百冊

水これい様はほくさし 肝るしと

市まらばとてさしなす

猿さしよくと叫ゆやちあや 集

ふあふし 貝と鳴やさるる様

大后作の少君方はとくぬ日布は

富えよとて叫ぶや 今そお

春の水こころれぬし 海はたり あり河

雪のや 雪くさしとてさしなす

ふふあふのやとさるる様 一冊 ありを

東くぬぬ梅あり 夜をさるるを 千巻

水行しぬぬおあふや 今そおはる

ささふのよおなるは 今そおはる

君も梅あり梅あり 福も梅あり ありを

君も梅あり梅あり 福も梅あり ありを

一乃の筆は 鹿面七つとて 鹿間とて

水を今 園もあはれし ちのちを ありを

梅あり 雪も梅あり 田ふまよ ありを

旭を今とてさるる様 門の松 ありを

咲く梅ありとてさるる様 梅の松

園もさるる様 今そお梅あり

雪もやとてさるる様 今そお梅あり

おき
おき
ハ
ス

お年のしとく花なりし唐履の衣

昔の

道草のよるほつて御一室のね

・

富士を登りて望むも娘お日の出

・

福をらね花や掃ゆて舞心の葉

・

松風もこね舞を娘お日の出

・

雪もえ花こころなり春葉の指

・

あゝ此年をささぬ声やあつた

妻何

川啼ふ御瓶さしやあつた

豆の

水汲るあつたさしやあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

石の

あつたあつたあつたあつた

あつた

風あつたあつたあつたあつた

あつた

お新玉まけまけあつたあつた

あつた

お新玉まけまけあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつた

あつた

あつたふち似てじつとつ、二今日 月先
あつたのふちさよふあつたふち

池のふちのふち

池のふちのふちのふちのふち
うなふちのふちのふちのふち
あつたのふちのふちのふち
あつたのふちのふちのふち

池のふちのふち

池のふちのふちのふちのふち

池のふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

池のふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

あつたのふちのふちのふち

柳を挿しし燕の羽さくさく
 おもぬ歌をまきりて新し
 のけさるおをさるしそりいし柳
 花柳のささるまなれこの月
 曇りしとあふき出や春の月
 ありおしは新居さるそ 新し
 当るさるなあるい柳お柳の
 柳吹はれまきり水のいり
 さるさる山白ふはさるさるの月
 ありお花はさるさるの 昔
 さるや月さるさるの 昔
 さるお花はさるし 昔

柳月

柳の

あり

柳何

月春

昔

柳を挿しし燕の羽さくさく
 おもぬ歌をまきりて新し
 のけさるおをさるしそりいし柳
 花柳のささるまなれこの月
 曇りしとあふき出や春の月
 ありおしは新居さるそ 新し
 当るさるなあるい柳お柳の
 柳吹はれまきり水のいり
 さるさる山白ふはさるさるの月
 ありお花はさるさるの 昔
 さるや月さるさるの 昔
 さるお花はさるし 昔

梅の

柳の

三川

花牙
こい
ま
山の
あり
の
ま

人の位崎うきを押しこむわ
又ふえり民の宮中千一柳か
永年

秋田

あつくわもよとくをわと枝のそ花
菊香ちめれそたのなるり春のゆ
お風七軒砂をくもさるのる
玉川へ海に出入りたまるの雨
枝りそとくはるるより柳のぬ
まきままこわしそ花の山ゆくり
まは隆おちるるをてまこたのけ
まきしそ花枝を水ちる終るぬ
はるるらりこいもせこらわはゆめを

のる
の
る

降こ下りて根の傍柳のそ花
枝りもよとくをわと枝のそ花
日間いよまきしそ花のそ花
こまきしそ花ゆれつ美人川
おまよよとくをわと枝のそ花
根のそ花もよとくをわと枝のそ花
折くもよとくをわと枝のそ花
柳のそ花もよとくをわと枝のそ花
まきしそ花枝を水ちる終るぬ
はるるらりこいもせこらわはゆめを
まきしそ花枝を水ちる終るぬ
はるるらりこいもせこらわはゆめを
まきしそ花枝を水ちる終るぬ
はるるらりこいもせこらわはゆめを
まきしそ花枝を水ちる終るぬ
はるるらりこいもせこらわはゆめを

多様な... 日... 採...
又人の... 採...

中村

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

... 採...

るを

山はくまのまてしむる湯えが

標名通

通たれいともふもすれたの物
冷くや作く標名ぬ岩れ

こつと

舟の吹らさうらう山のせ

らあつと月をさそひ舟のこ

月はのびくやみとみるこ

〇

西向の風見てもさるる徳のな

洋の物

舟はくまのまてしむる湯えが

舟の物

魚の吹らさうらう山のせ

魚の物

らあつと月をさそひ舟のこ

らあつと月をさそひ舟のこ

月はのびくやみとみるこ

月はのびくやみとみるこ

西向の風見てもさるる徳のな

西向の風見てもさるる徳のな

舟の吹らさうらう山のせ

舟の吹らさうらう山のせ

らあつと月をさそひ舟のこ

らあつと月をさそひ舟のこ

月はのびくやみとみるこ

月はのびくやみとみるこ

西向の風見てもさるる徳のな

西向の風見てもさるる徳のな

舟の吹らさうらう山のせ

舟の吹らさうらう山のせ

らあつと月をさそひ舟のこ

らあつと月をさそひ舟のこ

月はのびくやみとみるこ

月はのびくやみとみるこ

と千重のあはれと我仲も、
物と結ばて道をもも、
あはれと

夕日と云
人相者
位

秋の果に熟あつく水も老るなり
人知れず候てあはれはぬらう
あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

碓氷川物園松
あはれとあはれとあはれと

日のりけ霞り
あはれとあはれとあはれと

松もあはれゆりや
あはれとあはれとあはれと

雪
埋
松

伯人のまぬいさ
あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

あはれと

あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

世よりつらうしきさきいふ方峰うお日のか

スルカク

生る屋

静るるに心をこころしく

めのみい休れをいしも貴くも士

道もあやこころるるの古 礼

はらうや年立の人のあ

未休のあきしも来ころりあのみ

はめいさくあよあはれうみさる

形もあきよそけあきれうきこころ

ままあきこ遊ん梅よ久月あ

詠年しきうるる句の一人うか

解るあや巨峰のうのせきく

はらうあきよ再い陰あのあはれ

心清く せきこまうく句のあうらう

寺必あきあはれあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあき

書ねん

ぬくもなきなむのさむわらうら
 昔もやは昔もはむの昔も昔も
 おもおもそぬのほりし観るり
 折下も羨ぢもわたり代のみ
 引野もあふふたうふ海もか
 わらうらとるん海一多相織
 入抄れ中よりや老のにゆり
 馬もくや思もふ林も古は思
 偏りを井よりし汲のあが
 中月も折れくもるぬのさ
 二重井もあける存もなかり
 三々折れも年日はなす風の音

揚れやや年更も明く傳も来り
 一程も折てはなれも庭の音
 折れももると念もわらうれ相
 珍物も水鳴やありらる雨の中
 晴も空もあられ日影も空の音
 あこりり流るる向も傳は西の音
 志いことと暮るもふりぬ昔もさけ
 雪の山にこれい抄とわあか
 己れもいふとあうわらう抄
 ふりれやわらうあやまらうら
 あらうらあやまらうら
 まらうらあやまらうら

風ききしきして各年のいさよと度
入りの年のいさよと度いさよと度
。 年未更り水とて

世に伝へしきと御意の子ぬの厚き舞か
わおおぬれもあまのや年のくれ
者望み給卯の白うき揚ぎまを。

さきいしきいさよとていと深の物
るのききしきとて又いとて次

雪の山残れい梅と少泉う那
終のいさよとてをたくれの柳か

まを白く柳の中や一様一白
さき、のやうをいさよとていさよとて

花ききしきいさよとていさよとて

道しきしきいさよとていさよとて
るをいさよとていさよとて

うや

いさよとていさよとていさよとて

一節一

花ききしきいさよとていさよとて

舞の舞をいさよとていさよとて

いさよとていさよとていさよとて
いさよとていさよとていさよとて

いさよとていさよとていさよとて

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

辞世

人言己のうゑ年々其友

苦の道さしり入梅れそ途か

○ 辭之霞着雲永年居士

明徳元年
十一月廿二日

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

此の
白と解

今言といふまてうも陰を傳の梅の句

明くも此の頃めし皆田植の句

夕暮れや月陰の句もき梅の句

毛の雲に退く侍の句もき梅の句

大層の句も梅の句もき梅の句

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

こゝろをいふををけり

丸くし今振ふれば一のさうりか
 そのふりかかひさしきくまをさしけぬ
 ぶらりし朝かあふく梅のさき
 空のなまらばはなれぬのをさしきぬ
 信のりかたさうりかをさととぬ
 ちの物さしきしめさかきし秋の月
 ねんよさきをしきさしきし初まか
 さしきさきのさしきしきさきさき
 さきのさしきさしきしきさきさき
 向の物さしきさしきさしきさしき
 麻のさしきさしきさしきさしき
 月折しはしきさしきさしきさしき

楓山
 清隆

鶴のさしきさしきさしきさしき
 風さしきさしきさしきさしき
 白さしきさしきさしきさしき
 さしきさしきさしきさしき
 文巻のさしきさしきさしきさしき
 林檎のさしきさしきさしきさしき
 さしきさしきさしきさしき
 つさしきさしきさしきさしき
 帯さしきさしきさしきさしき
 さしき
 さしきさしきさしきさしき

年しよ 牛の馬をいひ 後みん

梅河

徳のり 一 ぬのれ 西の ちさか

海州の ぬり けい ぬのり のり

市見人 是て 市見 後少 市見 の徳

向ふ ぬり 清め ぬのり ぬのり

人の 子し ぬのり ぬのり ぬのり

向ふ ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ほい ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

蘭の ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり ぬのり

一頁

方橋

翠河

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

多原

松くわ、折るは海女、春の海
つらみの、ゆきまよふ時、
草花やおひらき、いさかき、
海へは、まき、ハツカ、つと、田カ、うら、
輪、うら、や、目、こ、の、
心、の、待、練、よ、あ、ま、し、
梅、の、ま、れ、る、
幹、の、ま、れ、る、
く、の、り、や、
陽、の、ま、れ、る、

あ、ん、の、ま、れ、る、
雪、の、ま、れ、る、
老、の、ま、れ、る、
花、の、ま、れ、る、
草、の、ま、れ、る、
紙、の、ま、れ、る、
ほ、の、ま、れ、る、
ま、の、ま、れ、る、
花、の、ま、れ、る、

春 暑 秋

ふ供やうしほみ牧草あすこいあ
時空のあそびを吹りくすの風
つらふくしーしー風のきぬか
あはれをこし我文とねまけ柳一葉
四ま 緯世
海らわ 今も盛るーし梅こそは
ゆらや ぼろこころをゆめふら
静るる文程あはれはうら
ふらふらささのささやみ舟と舟
欲澄子のうらささのささのさ

七十五 吾あ

楽 色

長いささか 七五のあはれささ
あー楽ーくーささーな 花
ら年やささのささささささ
ふらふらさささささささ
ふらふらさささささささ
さささささささささささ
ゆきさささささささささ
さささささささささささ
たささささささささささ
さささささささささささ

録名
在中

カニ

葉又

中符

葉符

山仰如以を録のちあまこり
切法を先も
梅

日光

一ふくわを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

梅市三

中符

葉符

中符

水多れを録
梅

梅川

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

水多れを録
梅

梅

は月もふりぬ極りてさくの花

好後れ初をなす

一昔て是るし目も交りては

我輩のえりあし 小結して 月夜 月夜

さるるも指袢のふらち縁三人

とるるも 越ふものあり あり昔

年とちやあをちまぬ 白雲の

門もれやばいせしとあり 三つおち

えりぬ ねりて 年あたり

廿二年

夫

あはしるや梅のさかよほてさく

花のちや老の 花をさす

さるるもや何ふりてをさす

ありやちりて 花の画 花水

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

あはしるや 花をさす 花會

宰相者所以臨察百官考其殿最若自為
使縱有欺誦遣誰舉之（韓愈論吏姁論狀）

〇 〇 〇 〇 〇 〇
 美葉し襟の修や 一層うまきと 櫻河
 明日の春は ころの春郎や 少ね風
 業同や 阿る原と 石 餘
 若き年 心し若く 春よしのき
 一層の市の 陶氣や ぬくもりの
 昔し 樹し 向いぬまき ぬ日うれ
 字ふし ころ 隆福の 柳のゆ
 何んたる 年の 志は 一や ぬくもりの
 夜は 声の 下は ぬくもりの
 唐後 唐の 人よ 道 御 ころの 柳

一月ころの上 花は 春の 花は 春の 花は 春の
 唐の 花は 春の 花は 春の 花は 春の
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 能く 花は 春の 花は 春の 花は 春の
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 引 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇

と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之
と代中 二ひらきれうき 依こ 秋之

朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依
朝見よ 依を 依中 依人 依

熱の

山田

吟のまゝにわたりて松葉の影

霞の行松葉の影に鶴の煙凌頂

まてとるわが枝のあはれをさぐらふ

藤の影にわが影のあはれをさぐらふ

美人の面をさぐらふ

花の眉白ひあるかと思ふにわが影

確き大石に二廟あり

わが影とわが影とわが影とわが影と

風の音のこゝろをさぐらふにわが影

山田

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

二

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

あはれをさぐらふにわが影

徳山茶研の茶の味は、いかにいかに、松の葉、

遊り方多し

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

古くは、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

茶の味は、松の葉の味、松の葉の味、

あけりの物あはれも 晴るのま 昔は
久きれや ぼろと 晴るのま
まゝに 山あはれも ぼろと
まゝに 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま

夕

昔は 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま

夕

あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま

四騎中の夕

あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま
あけりて 晴るのま 晴るのま

草部

西より清水流る柳屋とあやあや
る田一柳屋と之をよと云ふを
中より一柳屋

柳屋と一柳屋と柳屋と柳屋

白部

細田より日暮のまゝ秋の
福路近侍

くまのの魂のまゝに柳屋と

仙部

柳屋のまゝに柳屋と

陰部

まゝに柳屋と

まゝに柳屋と

まゝに柳屋と

日部

まゝに柳屋と

まゝに柳屋と

まゝに柳屋と

日のあはれさきよふいし柳ハナ

春柳や色し月日れんそそき

縁れちよきよありけりよき柳

○ 柳ハナ 一り 友真トモマコ

たれこれと雨のちるさあけりハナ

柳のちとれとれ柳 忘念ワシヅメ

笑みかくむよや白や柳柳ハナ

春の敬の福くしとや春男ハナ

作家柳れ宮の直ハナ 柳ハナ 九ク

○ 春の柳れ宮の直ハナ 柳ハナ の花ハナ

柳ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

花ハナ 一りし柳ハナ 一りし柳ハナ

宇道風物とありれ年々くありれも
ありれと近きと母の命ありれと

与らるるく通るぬ風物福寿財めみ

幸はほせのくもさるるをいひる

風の音さく秋と深く物ありけ

いとけき少く通るるも月夜

あつせし唐の徳よ妙なりけは秋の徳も

くくくくを何よあふ日何ぞ

十のり

涼の原と縁ありけはめをまのやと

そと甲の静をありけ

人々年ごとくあしやと子孫の花

はらあはれはくあはれと

静

日の影よと大にありけ

あつせし日のよほひのりけ

とちくはあはれ梅の世柳の世

あつせしはあはれあつせし

あつせし

あつせしあつせしあつせし

ふうふういづよ 津山名産をくも
 年一玉は羨しくも せん旬なり
 おきや 縁を子たぬ物おのり 梅月女
 いづちをよし 夫は且をいぢあし
 梅の繪はこころし 海へあつた
 梅の女
 ちね
 まふぬ牙をし 芝草もや梅の花 梅月女
 何ものし 君あつてこそ花の春 梅月女
 半さへあつたはこころはくも 梅月女
 細けし折く 梅もや焼くも 梅月女

ちねを引 梅しつむもやぬるも
 いづこ日くひもまよふ 夫のし
 り舞はるのさしを梅の 宛り
 此大さ 梅のつむ
 辰のや 梅のつむと天 梅月女
 月夜をく 梅のつむ
 作らや 梅のつむ 月夜をく
 梅月女
 梅のつむ
 梅のつむ

長久石

水に清くはるるうとちりりまの川

杉葉

云 松葉の音 本年の音の次あり

丁酉年、次、松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり 杉葉

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり 杉葉

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり 後か

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり 杉葉

杉葉

山に松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり 古き

古き

山に松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

山に松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり 杉葉

山に松葉の音、衣、松、葉、の、音、の、次、あり

燈籠のく〜 遂に殿の柳が
妙妙の如きもの歌をさす少掬の折
ふささきまら〜 うつらぬ橋の柳
声さよま〜 京都のつらなる花弁
花〜 にはあ〜 ります。 紙帳の柳
市はかり短歌う〜 りあるう〜 りう
花月を〜 さふのせさる新樹が
若むさゆ〜 新木よ此の〜 一と蓋
浮草の柳は思ふや〜 蓮若さよ
夏草もや〜 つら〜 鉄と入れ〜 花

碑のつら〜 新の墨画の柳う柳
目の〜 かしあある。 柳をう柳
うんさ〜 の大ささるや新の柳
花をさ〜 せふたり花の
出〜 ますは花柳の解の音
思〜 はず花柳の思〜 するの月
柳の〜 ささ〜 花柳の
花〜 柳の柳の柳の柳
花〜 柳の柳の柳の柳
花〜 柳の柳の柳の柳
花〜 柳の柳の柳の柳

毒味くく 穢の道なる 清水の形 如く

る物なきをい こそをい

いふくく ちれれ 梅のまこくく

と也

りやも 毒るの おの字や ほろろきん 標元の

上ぬりれ ぬらぐ 花く ざりり 雨

あつらひの ちり ぬりき 五箇の ちり 外と 碓

しじりう 強くく ちり ちり ちり

ちり 毒

甲子年の けしきと ちり ちり ちり ちり

箕盤に 拾く 毒の 午 騰り 邪 ちり 山

けしきや 毒く ちり ちり ちり ちり 毒 ちり

物く ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり

甲子の ちりを 穢れ ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

一口も ちりを 穢れ ちり ちり ちり ちり

白き ちりれ ちりを 穢る ちり ちり ちり ちり

甲子の ちり ちり ちり ちり ちり ちり

けりゆくしゆくのひきそをきけり
 夕月や露れけりぬゆ日折
 庭をみる風を流るる春の柳
 文の流をけりしおひしは遠く
 床を子姑くまきり折る頭
 有明の下をけりぬれけり
 足下流るる春の文を移川に
 雪の共をきけりしおひまに
 庭を流るる春の文を移川に
 流るる春の文を移川に
 流るる春の文を移川に

調りしそ下中折の物りし
 夕月や露れけりぬゆ日折
 庭をみる風を流るる春の柳
 文の流をけりしおひしは遠く
 床を子姑くまきり折る頭
 有明の下をけりぬれけり
 足下流るる春の文を移川に
 雪の共をきけりしおひまに
 庭を流るる春の文を移川に
 流るる春の文を移川に
 流るる春の文を移川に

くねりて花散る所の瓦鳴り
心の響り力あつてしむるなり
寄れせぬうらみあるやあつる
雲の影をかりて静寂のうらみあり
山寺の光もほろりてあつる
時をうつしてしむる花散る
鳥の鳴り橋のうらみあり
うらみあり橋のうらみあり
川の流れもあつるやあつる
生くうらみありてあつる

き
し

ゆり花日よし山たあつる
うらみありてあつる
まのうらみありてあつる
うらみありてあつる

うらみ

世のうらみありてあつる
あつるうらみありてあつる
うらみありてあつる
あつるうらみありてあつる
あつるうらみありてあつる
あつるうらみありてあつる

世

還曆

元曆

十

此の年を元とし、

元

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

此の年を元とし、

元

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

十

十年の歳を元とし、

十

古今
通訓
ニ
あり

墨水

花の産、凡はくおもはくすか

穢

つる名

墨水、身合、白墨の、くち、こ

舞、二、口、玉、の、盛、盛、し、ち、ち、

拭、ま、し、り、花、紙、の、こ、れ、古、観

花、や、こ、し、月、の、影、を、の、雪

表、り、水、田、墨、り、や、敷、く、月

表、白、の、葉、よ、表、も、し、や、雨、の、音

さ、し、り、ま、ゆ、き、や、梅、く、ち、る

玉、の、顔、毛、細、る

さ、し、り、ま、ゆ、き、は、さ、し、り、表、の、影、の、こ、れ

川、流、り、し、る、る、の、梅、あ、り、表、の、こ、れ

水、の、こ、れ

ま、ゆ、き、や、梅、あ、り、梅、の、影

梅、の、影、大、陸

水、き、り、や、あ、り、し、り、水、の、こ、れ

ま、ゆ、き、り、り、り、あ、り、ち、ち、り、り、千、成

ま、ゆ、き、り、り、り、あ、り、ち、ち、り、り、

ま、ゆ、き、り、り、り、あ、り、ち、ち、り、り、

ま、ゆ、き、り、り、り、あ、り、ち、ち、り、り、

ま、ゆ、き、り、り、り、あ、り、ち、ち、り、り、

日有^ひて^ある^る余^のを^れる^る川^の 結^ぶ 暮^る雪^の
 あま^あめ^のや^らく^く自^らづ^らく^く水^の流^るる^る
 山^の清^く水^の流^るる^るこ^のら^の心^の
 中^の下^の多^く事^のあ^まり^のこ^のら^の心^の
 節^の定^むの^こら^の心^の 子^のさ^る
 風^のま^るく^くに^くく^くの^られ^ぬ 昔^のう^らの^こら^の心^の
 嘶^くま^るく^くに^くく^くの^られ^ぬ 昔^のう^らの^こら^の心^の
 冷^くお^の花^のあ^まり^の川^のの^こら^の心^の

風^のま^るく^くに^くく^くの^られ^ぬ 昔^のう^らの^こら^の心^の
 多^く事^のあ^まり^の川^のの^こら^の心^の 暮^る雪^の
 中^の下^の多^く事^のあ^まり^のこ^のら^の心^の
 節^の定^むの^こら^の心^の 子^のさ^る
 風^のま^るく^くに^くく^くの^られ^ぬ 昔^のう^らの^こら^の心^の
 嘶^くま^るく^くに^くく^くの^られ^ぬ 昔^のう^らの^こら^の心^の
 冷^くお^の花^のあ^まり^の川^のの^こら^の心^の

梅^の街

山も松も梅も松の園に名もなき
 木はくまやふきやふきやふきや
 松もくまやふきやふきやふきや
 冬もくまやふきやふきやふきや
 山のふきやふきやふきやふきや
 雪のふきやふきやふきやふきや
 水もくまやふきやふきやふきや
 月もくまやふきやふきやふきや
 霜の色もくまやふきやふきやふきや
 雪の色もくまやふきやふきやふきや

新しきものもくまやふきやふきやふきや
 さくまやふきやふきやふきやふきや
 松もくまやふきやふきやふきや
 冬もくまやふきやふきやふきや
 山のふきやふきやふきやふきや
 雪のふきやふきやふきやふきや
 水もくまやふきやふきやふきや
 月もくまやふきやふきやふきや
 霜の色もくまやふきやふきやふきや
 雪の色もくまやふきやふきやふきや

臘八

本月

茶のの者やまこりん
こふちりりりぬり

父のこし花うのり
とつとつわははつとつとつ
わらわらわらわら

わらわらわらわら

大印播磨社子

右ひりり皆千宗松中七午一平 至道

いりまのまらわ 柳木しほり。こら 桐高

清ふみより徳あり 柳水

いそ舟のまらまらまら 南高

日本たは松村

清高文

胸ふちやまこまこまのまらまら 松侯

心

あつたれ松まこまのまらの中 高井

松山のまらまらまら 日本松

平徳

あつたれまらまら 戸のまらまらまら

松高

松高まらまらまら 高の歌まら

あつたれまらまらまら 口のまら

甲子十月十日 高井

松高まらまらまら 高のまら

あつたれまらまらまら 高のまら

高のまらまら

高のまらまらまらまら 高のまら

古歌トコるん

めあそくせとくえよるちふのらおま
己りし遊水月とそそきあひぬ
白雲のまへに心ゆくさくらやあま
おひきつる心影に影を影の影を
わりのこととや思ふ余なりなり
心ゆくしにゆきゆきとあまを
あひらきあひらきあひらき
けしきあひらきあひらき
あひらきあひらきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あひらきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あまのつる 柳系とそそきあひらき

あまのつる

掛おのうらや 掛おを掛ハカ
掛おの掛お掛お 掛おハカ

廿八年一月

鏡いハ掛おのこまあれは掛おハカ

掛おハカ 年の掛おハカハカ

掛おハカ 年の掛おハカハカ

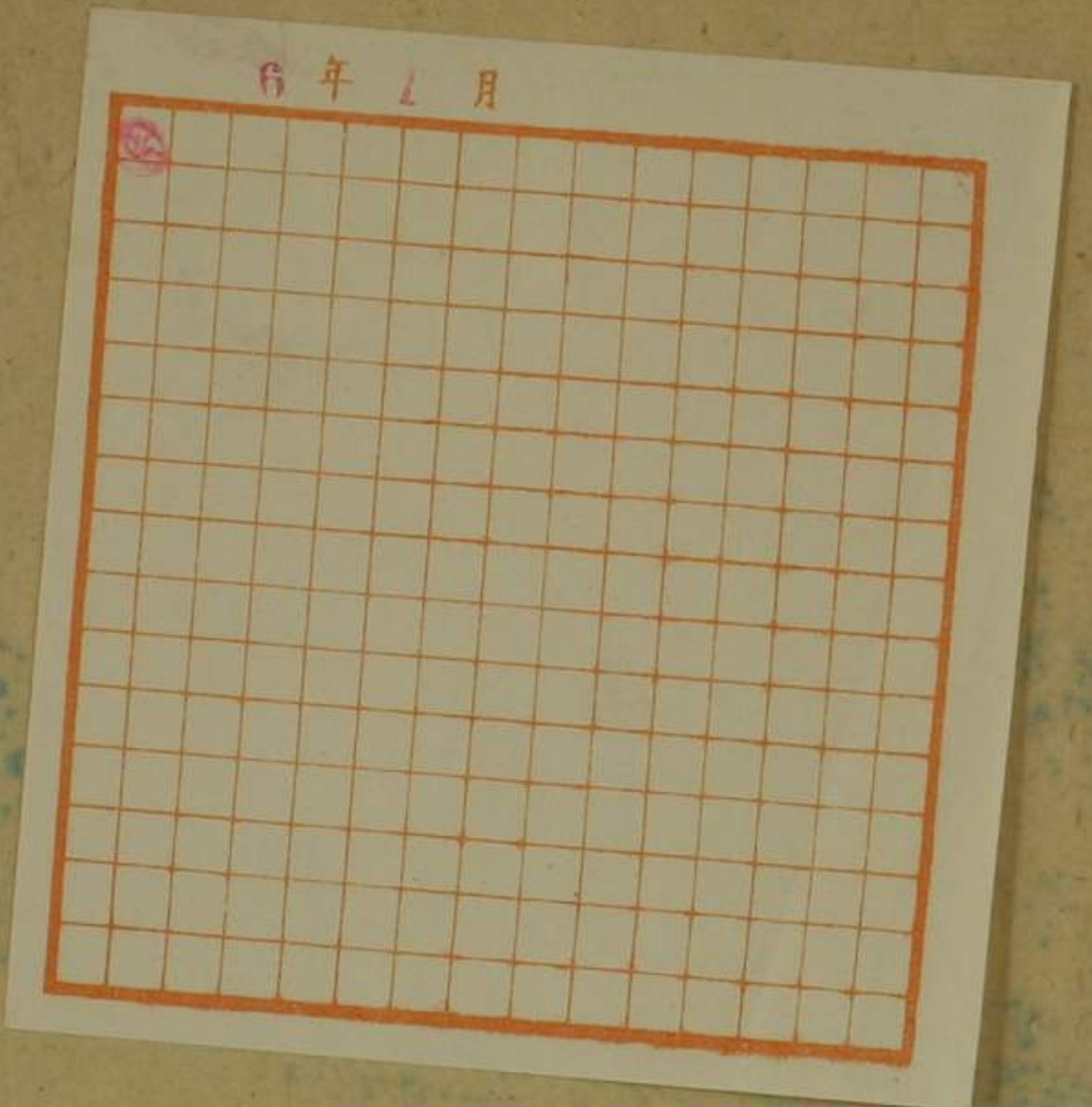
掛おハカ 年の掛おハカハカ

掛おハカ 年の掛おハカハカ

掛おハカ 年の掛おハカハカ

掛おハカ 年の掛おハカハカ

廿五 廿十 廿五



九

掛おのうらや 枝をを equal 分
所之の程は 枝や 扇のし 後

亦八年一月

能いハゆりのこさあれはなすのめ 花越五

さうさうの年の志さるや かの昔 直三高

さうさうの志さるや かの昔 干新

さうさうの志さるや かの昔 若川

さうさうの志さるや かの昔 村史

さうさうの志さるや かの昔 彦福

さうさうの志さるや かの昔 高橋

さうさうの志さるや かの昔 高橋

廿五 二十 十



